

突如、変更しております！

蟪蛄の斧

(とうろう の おの)

様々なシステムと私

第一回

団 士郎 仕事場D・A・N/立命館大学大学院

このマガジン連載では基本的に、書きたいことを書きたいように書いている。Part①1990年の京都児童相談所の一年を振り返る連載は楽しく終えた。Part②の連載もそのつもりだった。いくつか考えた末、K I S W E C（京都国際社会福祉センター）で25年近く継続している家族療法訓練のある一年を取り上げて、たまたま存在する逐語録（千葉晃央・記録）を整理しながら連載することに決めた。金剛出版2002年刊「ヒトクセある心理臨床家の作り方」の続編のつもりもあった。

ちょうどこの時期に、長年のある意味で念願だった、家族の構造に関する教科書づくりが実現した。「対人援助職のための家族理解入門」中央法規出版2013年刊である。私はこのスタンスで飽きもせず四半世紀、家族を見つめ続けてきた。

そう思って、「さて次の仕事は対人援助学マガジンの新連載 第二回目・・・」と思ったのだが、まったく気乗りがしなかった。一応仕上げた長い二回目の原稿を見ながら、パート1に続いて又、過去のことを書くのか・・・と思ってしまったのだ。

今、私達の周りには、いろんな意味で家族を巡る事件や出来事が山積みである。そこに目を向けず、過去の出来事を書いていることが面白くなってしまったのだ。そんな時には変更してしまえばよい。自分が気の入らないことをやることはない。義務感で書いたようなものが面白くなるはずがない。K I S W E Cの訓練記録は、またそのうち、違った形で手を付けたくある時が来るかもしれない。

こういう事態は昔、「児相の心理臨床」という身内の雑誌の連載でも起こしたことがある。そして確か二度の変更後、開始した連載が結果的に「ヒトクセある心理臨床家の作り方」になった。

「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」という箴言もある。第一回で期待してくださった方があったらごめんなさいね。

◆月◆日 業者研修会

大阪で講演を引受けることが少ない。業者（今回は「田中教育研究所」田中ビネーの所だ）の研修会の一部を担うこともまずない。なのに今回引き受けたのは、「木陰の物語」をまだ知らない人に紹介できたらと思ったのだ。私が自分で届けられる範囲には限界がある。他の人のネ

ットワークに参加させて貰うと、思いがけない遭遇もあるものだ。そこで滅多に仕事でいかない大阪城公園内の大阪 TWIN21 MID タワーに行ったわけだ。高層ビルの20階、いかにもビジネスって空気感たっぷりの大きな会議室に昼休みに着いたのだが、ちょうど民間資格カウンセラーの取得試験やポイントの説明を熱心に行っているところだった。そこで130人の幼児教育関係者向けに二時

間の講演。ほぼ初対面のみなさんに、アロハシャツ姿、レジュメなし、90分三連続講演の真ん中でというスケジュールだったのにも、二時間やりたいと言ったからかどうかは知らないが、開講12時35分という変則。私はいつもの調子だ。受講生の中には、自分の中の専門家のイメージとのギャップを感じた人もいただろう。でも、これこそ専門的仕事なのだよ。二時間、あっという間だったでしょう？

厳しい時代だからって、専門家の仲間に入れて貰って、仕事なら何でもやりますというのは違うのです。

今は、そんな事が分かれ目ではなく、自分は何をしているか、していないか。どこに軸足を置いて機能しようとしているかが問われている。

専門風の言葉を駆使し、世渡り上手な社交でクリア出来るなんて認識が、そもそも過去のもののなのだ。



高齢者が老後のことを考えると、今の間に堅実な投資を考えておかねば・・・と思って振り込め詐欺などに引っかかる図式と同じ事が、仕事の世界でも起きている。

自分を弱小だと定義して、少しでも有利な技術の学びで未来の安心をなどと、資格商売が加速する。

でも実際は、そういう小市民的自己防衛や、資格を取って自分の未来を守ろうなんて志向性は役に立たない。そんな志が低いものが、長続きしないことは自分でも分かっているはずだ。次々変化してしまうものを追いかけても、自己信頼感はいつまで経っても届かない。残念ながら、持ち込んだ「木陰の物語」の売れ行きは低調だった。

た。翌週、京都の教育相談研究会に80冊持ち込んだのは完売だったから、大違いの結果になった。

この近くにあった劇場でミュージカル「アイダ」劇団四季を見たのはもう10年以上前のこと。娘が入団してまだ役をもらえない頃にゲネプロ（開演直前の通しリハーサル）を関係者がみせてもらえるという。関係者扱いされるのも嬉しく出かけていった。

◆月◆日 K I S W E C W S

京都国際社会福祉センター（K I S W E C）・家族療法ワークショップSTEP 1と題した三日間の入門講座を、もう25年以上も継続している。今回31名の参加。これをメモしている今は、タッグを組んでいる早樫さんのジェノグラムの書き方の実習中。この前の時間は私が面接VTRを使って、「観察」とは何が見えるのかをワーク。

STEP1は研修プログラムとして、かなり洗練されてきていると思う。20年、何度も改定を加えた現在の形は、そう誰にも真似できないだろう。自画自賛だと言われても分かる人には分かる。

あちこちで実施されるワークショップやロールプレイなど、実習を伴ったプログラムを見る。参加者もじっと講義を聴いているより退屈ではないから受けも良い。しかし、その中味に関して私には疑問がある。

それは随分昔のWSでの経験から、今も継続する感覚だ。最初の体験は外国人講師を迎えた二日間のWS。希望を募ってロールプレイをしていたが、私は退屈していた。通訳付きの、構成度の低いやりとりはダラダラしているだけだった。中央に集まったプレイヤーと事例提供者、スタッフは集中していたかも知れないが、観客ポジションに同じ緊張感はなかった。高い金を払って、人の輪の外縁部でうんざりしていた。

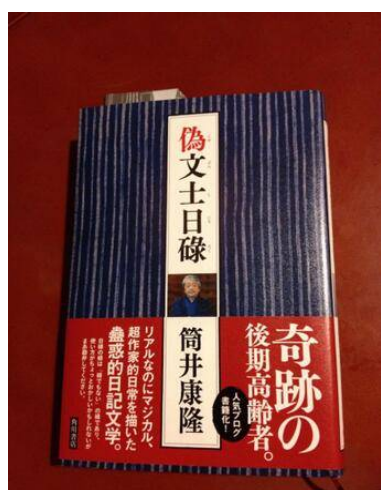
他にも、壇上で行われているロールプレイの稚拙さにあくびをかみ殺していた経験もある。多くの場合、理論・講義に比べて、実習の課題構成度が低いことが原因だと思った。その一方で、参加型のプログラムにすると単純に活性化してしまう受講者にも原因があると思っていた。だから実習を含んだプログラム構成の充実は、とりわけ関心事だった。

STEP 1 で実施中のプログラムの練られ方は中身だけでなく、使用空間の多様さや、使用機器や部屋数やホワイトボードの数からも、理解してもらえるのではないと思う。

三日間の修了証を手に、参加者が満足のコメントを残して、それぞれの居場所に戻ってゆくのを玄関で見送る。自然に生まれた毎回の習慣だが、気持ちを素直に形にするとこうなる。年齢層も職種も様々な31人が、異口同音によく学べたと実感を語ってくれるSTEP 1 だ。

今ここに若干の懸念があるのは、近年、公的機関に勤務する人の公費派遣の出張研修参加が増加していることだ。基本的に学びは、個人が、自分の中で金、時間、エネルギーの三本柱を負担したときに、その人の中に力として定着すると思っている。

◆月◆日 **BOOK 筒井康隆**



今楽しんでいるのはこの本。筒井康隆氏は高校（大阪府立春日丘高校）の先輩だ。そして同志社大学文学部文化学科でも先輩だ。私は心理学専攻で氏は美学専攻だったと思う。そして更に、氏が最初に就職した乃村工藝社は、中学生の時に会って今に至るまで兄弟のような付き合いのR. A. 君が定年退職まで務めていた会社だ。

だから一方的に筒井さんは格別なような気がしているのだが、実のところなんだかずっとモヤモヤしている。ちょっと引け目を感じるのは、小説があまり好みではなくそれ以外の著作の大ファンだということだろう。

◆月◆日 **カウンセリング？**

♪ よく働いてはいるが、仕事ばかりしていると思ったことはない。何一つさせられていることはないのです

トレスもない。具体的に動けば、ささやかでも成果が届くのは喜びだ。

今朝も相談室で長い経過のある人と話しながら、彼の努力が報われ、事態が動いている事が彼を支えているなあと思っていた。結果は人を元気にしてくれる。大きくなくても構わない。他との比較でなくて良い。自分にとって、一歩前進を実感できるように支えることが成果に繋がる。これは単純なことだが、とても大切なことだ。

♪ 木曜日、午前中はある組織の相談室で諸々の相談対応。本日は継続の方と新規の方。組織の相談室なので、その枠の中の人とその家族の問題ということになるのだが、これがなかなか興味深い。担当するようになってもう十五年が過ぎた。

主観的なものだが、ここでの私の問題改善率はけっこうなものだと思う。子どもの相談、親子関係、夫婦の問題、病気・介護絡みの課題、職場関係、男女問題と、いうならば「中流小市民日本人」の相談の幕の内弁当である。

ここに効果的に働きかけることが出来ていることで私は近年、少々自信家なことを言っているような気がする。

とても大変な事態や酷い状況のケースに精一杯関わる援助職の人達をご苦労様と思う。そんな相談やそこでの出来事や事件が、世の中の話題の中心になる。あちこちの現場（職場）でも焦点はここに偏りがちだ。

しかし、例えば今日社会において、多くの市民の子育てへの関心の中心が児童虐待ということはない。高齢者が皆、ボケるわけではないし、男がみんなDVをするわけではない。著しい問題が、話題もエネルギーも全部持って行ってしまうような社会づくりには用心が必要だ。

警察が凶悪犯罪捜査に重点を置いて、軽微な犯罪をおざなりにした結果、社会の秩序は乱れた。犯罪の検挙率は下がり、軽微な犯罪は増加した。まだまだ諸外国に比べれば安全な社会だとは思う。しかし、ジワジワ崩れているものは、ある日堰を切ったように蔓延する。

市民社会は名探偵を求めていたのではなく、街のお巡りさんを求めている。だからKOBANが世界で話題になる。街の治安回復を地下鉄の落書きを消すところからというのは、ニューヨークで成功した取り組みだと聞く。同じメカニズムがあらゆるところで起きる。特殊疾患や

重篤な症状に対応する神の手ばかりをもてはやす社会は、町医者生き甲斐を削ぐ。

しつけの行き届かない子の診察に手こずりながら尽力していた小児科医が、クレーマー両親にうんざりして看板を下ろす。我が子に小児科を継がせない。

一方、その正反対の動きしかできていないのがマスコミである。叩きやすい小市民の悪を徹底的にたたく。そのくせ、大きな不正や虚偽には向き合う気概も調査能力もない。原発報道に関する日本のマスコミを見て、世界のメディアからの日本評価は大暴落した。汚染水はただ漏れただけなのに、情報は漏れてこないなんて、東電はどこに壁を作っているのだろう。

スポンサーあつての一企業だから・・・とか、ジャーナリストも生活があるなどと戯言をいう。そして、ちいさな不正のあった小市民を叩いて、次に何か新たな事件が起こると直ぐ忘れる。大きな相手には、最初から抱き込まれていて、何も出来ないというのはどうしたことだ。

アラブの春のデモは早々に報じた新聞やTVが、原発反対の首相官邸前デモの報道に、随分消極的だったのには驚いた。

そして次々に、隠してあったことや、見ぬふりをしてきた汚染や失策が明らかになる被災地の現状を明らかにする事にエネルギーを向けようとはしないのはなぜだろう。

国民の70パーセント近くが「今の生活に、まあ満足だ」と答えたという調査。被災地ではどうだったのだろう。「あの人達のことは置くとして、私は今、それなりに満足です・・・」なんてことを言っていたら、我々に明日はない。どんなことも、他人事であるはずがない。

しかし、こんなことばかり言っていると嫌われる。

人々はほんわかしたぬるま湯が好きな時代なのだろう。その湯はきっと原発からの夜間電力でまかなわれた、お得な料金で沸かしたもののなのだろう。何がお得なのかは考えない。

♪ 相談室の新件は、新任中間管理職女性からの相談。係員にとって、バランスの良い業務進行管理とはのノウハウを伝授する。カウンセリングではなく戦略会議である。

私の近年の相談は、ますますカウンセリングではなく、相談・作戦化している。気をつけないと細木大明神のよ

うなことになってしまいそうだが、占ってはいないし、運命だなんて思ってもいない。でも型どおりの受容や共感などとも思っていない。

気持ちのことばかりを大切だと語る世論が、いつの頃からか形成された。感情が大切ではないわけではない。しかし、寄ってたかってそんな話ばかりしていると、どうなるかを示しているのが、今の世の中ではないか。

自分で出来るレベルにある人には、頑張って貰うのが一番である。依存的な病人ばかり大量生産して、短期的マーケットを築いても、未来に勝算はない。

◆月◆日 東京

本郷三丁目で家族心理学会の常任理事会。新幹線の車内でDVDを一本観ようと思った。加えて、書きかけの原稿作業もしたかったので、わざわざ本数の少ない「こだま」を選んで乗った。「のぞみ」なら2時間チョットで着くところを4時間。

それでも余裕をみて京都を出発したのに、「都内のゲリラ豪雨で一時運転を見合わせた影響で・・・」と小田原でストップ。「定刻通り、小田原駅を通過しました。あと10分ほどで新横浜・・・」じゃないのかよ！と心の中で突っ込んでみたものの、結果、この分では遅刻かもという事態に。なんだかなあ...と思うが、もともと大した役割もしていない理事なので、まあ良いか。世界はおおむね私とは関わりなく動いている。

結局、ぎりぎり定刻に間に合った常任理事会は、議題が多かったため21時30分頃終了。

通常なら日帰りも可能な会議なのだが、翌日はノルマのない日だったので、いつも使うビジネスホテルを取っておいた。



翌朝、一日フリーな東京で、さあどうしようかと思案。恵比寿にある写真美術館ホールで、映画「ビル カニンガム&ニューヨーク」を観ることにする。制作の喜びを満喫して生きる84歳のファッションカメラマンを追いかけたドキュメンタリー。NYのファッション界では知らない人はいないが、重鎮でも何でもなし。みんなが写真を撮って欲しがりますが、権力とも金とも離れたところでカメラマンを満喫する生き方自由人。

カニンガム氏の縛られることの少ない時間の過ごし方に、幸せな気分になり、新たな創作のアイデアが生まれた。

その後、本館の東京都写真美術館で見たのは女性カメラマン米田知子の作品展。ある場所の写真をみせられ、そこにはどのようないわく因縁があるかという短い解説を示されると、見えるものが少し揺れるのが面白い。



◆月◆日 被災地復興応援プロジェクト

♪ 終日、9月のむつ市を皮切りに、岩手、宮城、福島と四県で開催三年目になる被災地応援家族漫画展用パネルの制作。手間のかかる作業で、やっと5作品中2作品完了。8月半ばまでに仕上げなければならないから早めの準備をする。東北以外の場所（京都、埼玉でも開催）での漫画展開催の希望があればお知らせ下さい。

♪ 三作目のパネル作業進行具合の関係で、キリの良いところまでやりたくなり仕事場泊。今週2泊目だ。そ

んなに仕事ばかりしてどうするのと言われそうだが、出来上がっていくのが嬉しいばかりという幸せ。

午前3時15分、第三作がとりあえず上がった。プリントアウトすると早速間違いが見つかったが、これは全作品完了後の修正だ。全作業の半分が過ぎて、まだ時間はたっぷりある。明日もこれにかかり切れる。今日はもう寝て、明日の昼前から第4作に取りかかるかな？それとも、気分転換に文章仕事をするかな？

♪ また、昨日から泊まり込んで一日仕事場に籠もっていた。パネル漫画展の準備を九割方仕上げる。業者さんにデータを渡してB全版パネルにしてもらうまでには、まだしばらくある。これから細々手を入れていく。三回目ともなると、定例の作業、スケジュールの感じがする。

3年目になるのだから漫画展に関しては、もう少し事前告知活動に力を入れようと思っている。たくさん来ていただく必要は無いのだが、開催していることを知らなくて来られない人があるのはつらい。

まずは8月30日金曜日から9月9日までむつ市図書館にギャラリーにて（これは、マガジン発行日には終了している）。つづいて、10月1日から10月27日までの約一ヶ月、宮城県多賀城市立図書館で長期展示。

その後も、11月第一週は岩手県宮古市（予定）で、12月の第一週は福島県（福島市。11月中旬には二本松市でも）で、漫画展&プロジェクトプログラムを開催する。都合のつく巡り合わせがあったらおいで下さい。（写真は2011年第一回むつ市図書館ギャラリー。中村正、村本邦子と）



同時に会場で、小冊子「木陰の物語 第三集 —side by side—」も配布する。

こんなことが何になるのかなどと短絡的なことは問わない。復興とは何か、支援とは何かなど、簡単に答えは出ないし、出たところでそんな言葉はきっと不十分だ。

あの大きな被災と、そこから続く現在のような全体を網羅できない事態に向き合うには、今、出来ることを、それぞれが継続して担うことだろう。

◆月◆日 マンガ集団「ぼむ」



この店でこのようなものを食べながら、月例の漫画集団「ぼむ」の集まり。40年以上も、それぞれが無事元気で活動しているのだから、先ずは良いだろう。もう少しクリエイティブなプランが出てきてもいい気もするが、仲間の年齢を考えるといつまでも先頭を走りたがるのもなあと思う。

メンバーの篠原ユキオは8月末に東京で三度目の個展。今、大きなキャンバスに一コママンガを描いているらしい。観に行くのが楽しみだ。

私は彼のような絵描きではないので、そういう作業はできない。我々のグループにはそういう作画のできる人が三人いる。カワキタカズヒロ、柳たかお、そして篠原。この三人は読売国際マンガ大賞のグランプリ受賞者である。世界中から1万5000点くらいの応募がある大規模な賞で、賞金もグランプリは200万円。三人はやはり絵描きとして実力者だ。

◆月◆日 Cinema アメリカ映画

「ペーパーボーイ」は曲者の映画だ。「プレシャス」の監督の次回作。こういうのを観ると、自分の中にあるア

メリカの歴史記憶が蘇る。日本が今のようじゃなかったように、アメリカも今みたいじゃなかった。

米国が抱えていた問題は、貧富の差だけではなく、様々な人間の生活の匂いがしていた。1970年代を描いた暑苦しい、湿気の高いアメリカ映画、好きだな。

パニックと自分の家族だけを助けようとするヒューマニズムがセットになった泣けパニ（泣けるパニック映画）の対極にあるような作品だ。



◆月◆日 日常

♪ 朝から雑誌連載の「木陰の物語」新作下書き完了。午後からは大学院の「家族療法・家族面接技法」の授業。その後、桃山K I S W E Cに出向いて家族療法入門講座を3時間弱。

予定通り、スムーズにこなして終了後、C君と時々行くめし屋・伏見食堂で遅い夕飯を食べながらいろいろ話す。ここのおばちゃんは、「22時過ぎると、おかずは全品半額になるから、ちょっと待っとき！」と以前教えてくれた。その時、21時55分くらいだったのだ。

食べながら新刊「家族理解入門」の感想を聞かせてもらう。なかなか楽しい。

♪ 少しゆっくりしていたせいで、ぼんやりとスタバで原稿をいじっていた。だが「ぼつぼつ何かの締切かなあ…」と思ったりしていたのは、完全にボケていたわけではないということ。でも、8月にも同じようなことがあったから、やはり少し惚けてきているかも。

今日中に発送しなければならない原稿が複数あった。夜は大学なので夕刻までに、途中まで書いて置いてあった各原稿を、納得のいくよう仕上げて三件、必要なイラストも二枚仕上げて送信しなければならなかった。そんなわけで、急に活気が出てしまった。あーあ。

♪ 大学院の前期プログラムが今日で終了。後期から始まるM1クラス生の顔見世もあった。後期から4人の教員で10名の院生を1年半、指導することになる。社会人が4人含まれているのは良いが、全員女性は家族クラスター開始以来、初めてのことだ。皆、興味関心も多岐にわたっていて、今後の展開が楽しみだ。

◆月◆日 Cinema 宮崎アニメ



久しぶりに公開初日の映画館で、「風立ちぬ」を観た。宮崎駿さんが思い入れのある物と人の人生を、走馬燈のような物語に仕上げた大人のための作品。

主題の一つに結核が登場するので、我が身の経験から思い出す記憶があって、いろいろ考えてしまった。

この作品、世間は賛否両論だそうだが、私にはいい映画だった。批判の中に、今の感覚であの当時のあり方を責めている人がいる。そういう人はおそらく、将来又、その時の感覚で、今を責めるのだろう。

私はそういううつろいやすい正義感のようなものを信用しない。長続きするものしか信じないのは、自分に確信があるからではない。時代に左右されるところを自分も持っていると思うから、声高に今を叫ばない。今など、明日の過去に過ぎない。

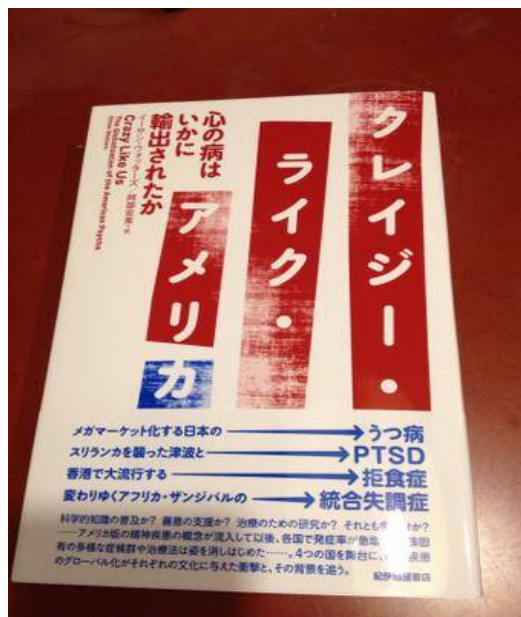
しかしだからといって、現在に無関心な人のあり方も支持しない。否応なく形成されている今の意味を吟味することなしには、過去も未来も語れない。

時代は同じ所を回っているのではないはずなのに、今また日本社会は、過去にもあった空気を醸し出している。選挙で選んでしまった者たちの愚かしい行いに、選んだ側が引きずり込まれてゆく。

意見の違いや、見解の相違を「ねじれ」等という別の言葉に置き換えてイメージ選挙戦略を立てたあざとさで、ままと結果を手に入れて、それを恥じることのない政治家が、まともな大人であるはずがない。

経済のことばかり口走る政治家は、「要するに、金だ!」と言っている事になるのを、平気なのはなぜだろう。そんな言い草が下品である認識は、日本社会の大人の良識として身につけてきたはずなのに。

◆月◆日 BOOK ジャーナリストック



Facebook でどなたかが、お勧めになっていたのをみてamazonで夜に注文。翌日には届く魔法のようなシステムの気持ち悪さは、又別の話題だが、この本の中で触れられる日本社会の鬱病の蔓延とは無関係じゃない。

読み始めたらとにかく面白い、面白い。第四章の「メガマーケット化する、日本のうつ病」から読み始めたのだが、久々に膝を鬱、いや打つ、うつ。

要するに抗うつ薬パキシルの販売戦略と医療者のコラボレーション。だからこれを、米国製薬メーカーの日本進出戦略だと思えば、大成功した事例である。

数年前まで、ほとんど業績というようなものなかった国で、爆発的成功を収めたビジネス物語。だから、ビジネス書の所に置かれていたらいいのだろう。筆者が書いているのはそういうことだ。

この本で取り上げられているのは四つの国の別々の精神疾患。それぞれ違った精神風土の下の疾患を、DSM標準にラベリングして、治療目標もアメリカ標準化して治療理論や薬を販売する。

抗うつ剤の効能に関する疑義を医療ジャーナリストに批判されたことをうけて、米国精神医学会会長ナダ・ストットランドは、「現実には誰もがやっている活動に対して、医者だけが墮落しているとみなすのは不公平だ」と語ったという。

この意見の正直さは、面白すぎて笑えない。臆面もなくこんな事が言えるメカニズムが、あらゆる事の経済化であり、グローバリゼーションなのだろう。

◆月◆日 禍害ということ



対人援助学マガジン連載中の中村周平君のことが、今日の朝日新聞で大きく取り上げられている。学校スポーツ事故の再発防止に関して、「過失責任を問う流れでは、被害者は救済されないし、再発防止への道筋作りとしても弱い」という話。ぜひ、無料webマガジンの連載をご覧あれ。

この問題は今、同根である柔道における学校スポーツ事故問題として注目を浴びている。柔道界は最近、ごたごたが続いているが、この問題とも無関係ではない。

学校スポーツの中で、柔道とラグビーが飛び抜けて重大事故が多い。これはネット統計などみれば直ぐ分かる。加えて、諸外国の同競技の学校スポーツ事故件数と比べると、日本がやたら多い。この事実にはもっと誠実に向き合わないとい何も変わらない。

周平君はラグーマンだが、そのたどり着いた姿勢が凄いの、彼は被害当事者として学校や関係者の過失を問うという従来型の裁判モードから脱却しようとしてきたことだ。

誰かに重大な過失があったから、重大な事故が起きたという文脈では、不可抗力に近いかたちでも起こりうる学校スポーツ事故は語れない。誰かに悪意や重過失があったから起きたという発想は、そうでなければ事故は起きなかったという根拠のない結論に導く。

そして当然、状況そのものへの改善の議論にはならず、過失責任者を指弾して幕引きし、問題点には着手されない。

◆月◆日 大学院

♪ M2修論の第一段階の詰めが迫っている。それなりのものにするなら、この時期の絞り込みが的を射ていなければならない。たった一つの言葉との遭遇。それに会えると、自分の中の問題意識や疑問、好奇心などがググッと釣り上げられてくる。そんなフックになるキーワード探しに、今日も一時間半付き合う。

問題を見つける面白さは尽きない。いろんなジャンルから入学してくる応用人間科学研究科・対人援助領域。中でも我が「家族機能・社会臨床クラスター」は、世の中に対する疑問と好奇心の巣窟である。

♪ M2には最後のポスターセッション。5つに分かれたクラスターごとに、30分ずつの発表が入れ替わりで3時間続く。ここまできると問題意識もそこそこ面白くなってきていて、期待の持てるものも多い。しかしい一方、まだまだ緻密化しない総論もあって、早く身の程を知らないと心配もする。

♪ 立命館大学院応用人間科学研究科の十周年記念に刊行した二冊。家族クラスターを卒業した院生たちが沢山、それぞれ活躍している分野のテーマで書いていて嬉しい。2冊合わせて550ページの大部。機会があれば、部分的にでもご覧いただけると有り難い。

私は、十年以上継続している地域でのワークショップが、どのような根拠で形成され、その継続が何をもたらしたかを「融合と連携」という言葉で整理して書いている。

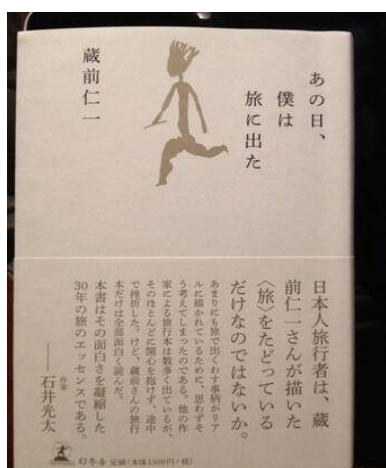
「地域ネットワークの形成」というありきたりな話題が、真に形成定着するために、何が自覚されていなければならないかを書いたつもりだ。



◆月◆日 旅行人

発売を心待ちにしていた本を見つけた。蔵前仁一さんは「旅行人」という雑誌を長い間出していた人だ。

その愛読者の集まりが京都であった時に出掛けて、お目にかかったことがある。二十年以上も前のことだったか。旅好きな私には、とても近い感じのする著者だ。旅することとそれを語る事は楽しい。



私の中にあるもので、比較的露出の少ないのが、旅の体験談だ。仕事で文章化はしたことがない。息子達との「父子旅」はマンガにした事があるが、妻との旅の失敗

談は書いたことがない。そのyり、どこかに書いてみるかな。

◆月◆日 自由時間

木曜14時。今週のノルマが終了して、週末の出張WSの入っていない今週は、日曜深夜までフリーだ。何をしようか、何もしないでいようかと考える贅沢。とにかくいい自由時間。

まずこの映画「偽りなき者」をみる。緊密な地域ネットワークというか、閉鎖社会と言うか。同じ仕事でも言い方によってずいぶん違う。これがある事件を通じてコロコロ入れ替わる怖さを描いた映画。

嘘とか本当とか、加害とか被害とかに、当事者だけではなく周りも揺れる。主人公はその場に留まって和解。しかしそこに沈殿したものは、これからどんな意味を滲ませていくのだろうか。

パンフレットの隣の果物皿は、入ったことのなかったショッピングビルの地下にあるフルーツパーラー。女性客が圧倒的な店は、ちょっと気恥ずかしい。だからこそ、ジュースやコーヒーではなく、本日のフルーツ盛り合わせを注文。食べ始めてから気づいて慌てて写メ。マンゴー、オレンジ、バナナ、パイナップル、スイカ、ブルーベリー、キウイ、バニラアイスクリームで900円。いろいろは似ていたけど美味しかった。



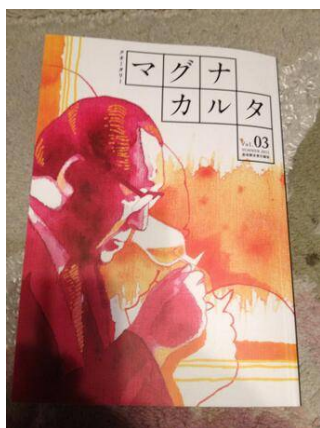
◆月◆日 BOOK 季刊雑誌

季刊「マグナカルタ」の第3号。どれくらい売れているか知らないが、まだ継続発行されている。おっさん向けの読み物かもしれないが、第3号なかなか読みどころが多い。

新連載のサントリー佐治敬三（故人）社長の物語。鳥井一族の子でありながら佐治姓を名乗り、サントリー躍進の名物社長になった人の家族の物語が興味深い。

この雑誌の編集長は島地勝彦。開高健との交友でしられ、何冊も本の出ている業界有名人。企画も面白く、対人援助学マガジン連載企画の参考にもさせてもらおうかと思ったりした。（インスピレーションですけどね）

面白いと思える雑誌が少なくなった。かつて愛読していた雑誌はほぼ皆、休刊になった。雑誌は時代の生き物なのだろう。



だから思うのだが、「対人援助学マガジン」などという季刊雑誌を三年も続けていられるのは幸せだ。

私は趣味でこれまでミニコミはいくつも出してきたし、マンガの同人誌も長々発行してきた。新聞のコラム連載や雑誌連載、出版社から本もマンガで10冊、家族心理臨床系で10冊あまり出せた。それぞれ楽しく、嬉しい経験だった。

そして今、かなり勝手の編集長として季刊誌を出し続けている。世の中とインフラがこんなことを可能な状況を形成してくれていればこそその快挙だと思っている。

カラーの頁、自由な構成。頁数にこだわらない掲載。一人作業ならHPかブログになったのだろうけど、それよりもマガジンが魅力だ。

◆月◆日 Cinema 京都シネマ

是非ともこれとは思っていたので、時間を作って京都シネマでこれを観た。母の愛を知らない男が愛に目覚め、それを失う物語。知らなかった時よりも幸せだったろうと思わせてくれるが、残酷な結末。

おそらく皆、観たものが異なるのではないかと思われる物語の顛末だった。

予め失われた世界で生きてきた者は、己の喪失を知らない。誰かがそれを失うことに、どれほどの苦痛を味わうかも想像できない。ただし、それが不幸かどうかは、簡単には言えない。知らない方が良いという事態は少なくないように思う。



しかし知らない者は永遠に、知った上でそれを乗り越える苦しみと、その試練から得る人生の価値の両方を知らないままで。

この映画のことは、家族療学会誌に連載中の「映画の中の家族・連想映画館」で次回、書くことになると思う。

◆月◆日 連載

♪ 午後からペン入れを始めた「木陰の物語」新作が完成。絵を描くだけではなく、完成までに手間のかかるパソコン仕事もあるのだが、出来上がると嬉しい。

毎月一作、14年も続けている事がもたらしてくれる幸福感がある。作品を連載し続けることで「漫画家である」と自認できるのはいい気分だ。

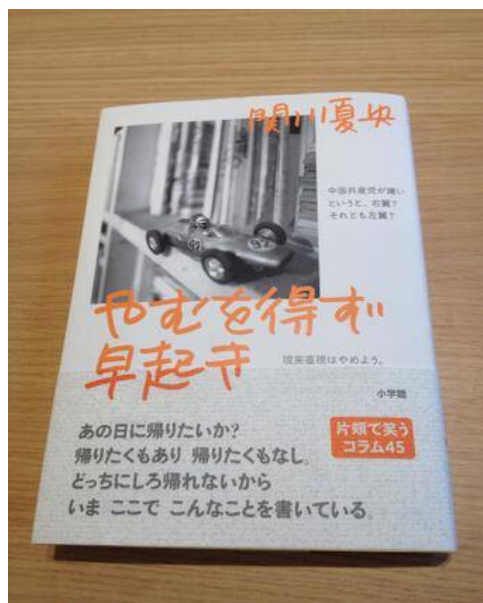


♪ 三日間留守にしたので、仕事場D・A・Nのポストは一杯。その1つがこれだった。連載誌とは別の増刊号。既にあるものを編集して1冊にと聞いていた。

新たにレイアウトされた木陰の物語「三千里」を読んでウルツときてしまった。過去に自分の描いたものを読んで、いったいなんだそれはと思う。物語の働きは不思議だ。



♪ そもそも、「家族の練習問題」という私の本のタイトルの由来はこの本の著者にある。関川夏央著「ソウルの練習問題」はとてもいい本だった。そのことがずっとアタマにあって、木陰の物語を本にすると、タイトルを求められて出てきたのが「家族の練習問題」。まもなく第5巻が出るが、こんなに続けられるとは思わなかった。



長男（遊）が発行人として仕切ってくれているから続刊出来るのだが、コンスタントに細く長く売れる商品になっている。第一巻が今でも売れてくれる。2005年末に発行したのだから八年も前だ。

関川さんは「週刊現代」に毎週、こんなことを書いておられるのかとちょっと驚く。とにかくコラムが濃い。

◆月◆日 BOOK 堤 未果

書いてあることはおそらくこのような事であろうと読む前に分かっていた。岩波新書の大ベストセラー「ルポ 貧困大国アメリカ」の続刊三冊目である。著者は放送ジャーナリストばばこういちさんのお嬢さんで、HIV訴訟団原告で参議院議員の川田龍平氏の妻だ。



で、読むとやっぱり面白い。アメリカさん、もう少しちゃんとやろうよなんて思う。米国に暮らす人たちの圧倒的多数は、少し賢明さの足りない弱い庶民（ごめん。チャンスの平等、そしてアメリカンドリームなんて絵空事に、丸め込まれているからね）。

一握りの悪賢者に何もかも、もっていかれている。民主主義と資本主義の名の下に、結果自己責任の競争原理をたたき込まれて、負けたら仕方がないと思わされている。ルールがフェアじゃない。ローンの払えなくなった一戸建ての家から、車一台に家族乗り合わせて放り出される父親に、イラクに行けば美味しい仕事があるよと誘いかける金持ちがやっているのが自由競争なものか。

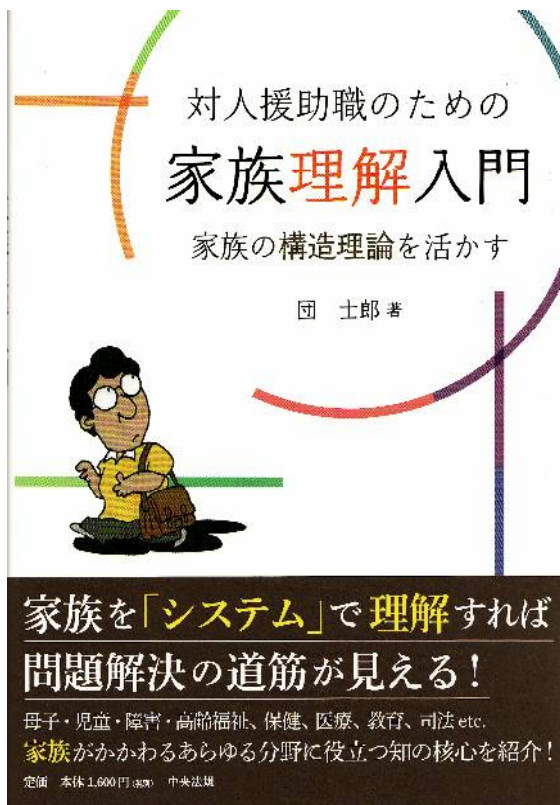
この本では、アメリカの農業を支えてきた中小経営者を、食品製造過程の安全管理強化と称して沢山の書類手

続きで追い込んで、土地を手放さしてしまうやり口が書かれていた。

アメリカンフットボールじゃないんだから、勝ちか負けかしかないなんて事はない。悔しいだろうなあ、普通のアメリカ人、もっと怒ったら！と思った。

◆月◆日 **家族療法学会** & . . .

三日間、家族療法学会で東京、船堀。学会三十年の総括シンポを聞いていると、いろいろ思いだすことがあって楽しい。しかし新しいことを学んでいるという感覚の楽しさはもうない。長くやってきた末の合点に会う旅のような気分だ。会場で広島岡田隆介さんとダベっていると楽しい。それにしても、なんだかあちこちから、いろいろよくしてもらって感謝だ。



新刊書「家族理解入門」中央法規出版も、学会場で用意された40冊完売だったときいた。ありがとう。

引き受けていた事例検討は、提出者のY君が楽しんでくれていたようなので、それで十分。司会の先生にはほとんど活躍の場がないようなことで、申し訳なかったが。

WSも会場一杯の参加者の中には、経験豊富な方達も沢山いらしたのに、楽しんでいただけているようだった。

引き受け過ぎ感があったが、こういう結果だといいかと思う。この気分が継続していたのか、来年2014年の

神戸での家族療法学会のワークショップも、大会長の植村さんの依頼で、引き受けた。「ジェノグラム面接法」を又やることになる。工夫を加えておこう。

そう、来年は京都教育大で開催の家族心理学会でもワークショップを引き受けることになるような流れだ。来年も暇にはならないなあ。

* *

最後に、新刊書について、今私の思っていることを述べておく。

この本に関して私はとても満足している。編集者の手を通して完成した一冊の本として気に入っている。そして同時に、初めてなのだが不安もいっぱい持つことになった。

理由は、これは専門書のジャンルに入れざるを得ないし、同時に読む人にとっては手引き書のカテゴリーにも入ると思うからだ。

ここでは、「私は家族とはこのようなものだと思う」と宣言している。しかしそれは当然、私の考える家族にすぎない。それを誰か他の専門家の理論や概念で補強していない。構造派のミニューチン氏が、「私が言っているのは、そんな意味ではない」というかもしれない。

それくらい、私の届く範囲の今日の日本の家族を考えた。きっと役に立つと思うが、正しいかどうかは疑問な所があるに違いない。

そんなことを考えているので、出版した後も、ちっとも終了しない。度々手にとって、ランダムに拾い読みして、「うん、やっぱりそうだね！」と独りごちている。

2013/08/25